



幼児の 教育

家庭・保育所・幼稚園

好評発売中!

平成17年5月、
保育所のための第三者評価ガイドラインが、
新たに生まれ変わって国から示されました。
本書では、この新・ガイドラインを
詳細に解説していきます。



保育所の新・^{ガイ}第三者^ド評価^{ライ}の^ン
読み方・受け方
— 自己を点検し、評価を受ける —
小笠原文孝・小出正治 共著

A4判/338頁
定価2,940円(税込)

目次から]

PART1 第三者評価総論

- 1・第三者評価とは？
その本質と意義・目的
- 2・望まれる評価機関のあり方・
評価者が具えるべき資質
- 3・さまざまな評価の視点
～「何を」「どこまで」評価するか～

PART2 評価基準ガイドライン解説

- 評価分類Ⅰ 福祉サービスの
基本方針と組織
- 評価分類Ⅱ 組織の運営管理
- 評価分類Ⅲ 適切な福祉サービスの実施
- 評価分類A

PART3 資料

キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第105巻 第10号



幼児の教育 目次

—第一〇五卷 第十号—

© 2006
日本幼稚園協会

巻頭言 からだの主人公になる……………高橋 和子……………(4)

特集〈運動会〉

運動会と保育学的想像力……………太田 光洋……………(8)

“うんどうかい”から“運動会”へ……………甲斐久美子……………(14)

小学校と運動会……………井ノ山正文……………(20)

日常の中の運動会……………佐藤 寛子……………(26)

子どもたちの装い

—十七世紀オランダの親たちの鏡像—……………小林 頼子……………(32)



女性の心と体に忍び寄る危険(2)

―思春期から成年へ―……………大森 美香…(42)

保育の変革を目指して(4)

―折々に考えたこと―……………入江 礼子…(50)

私が通った幼稚園・保育園(14)

保育園という原風景に住む人々……………新開よしみ…(58)

表紙絵／さのまきこ

扉題字／津守 眞

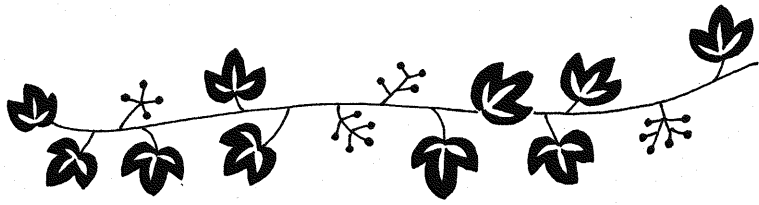
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／さのまきこ

編集委員／浜口 順子・佐藤 寛子・吉岡 晶子

編集部／河合 聡子





巻頭言

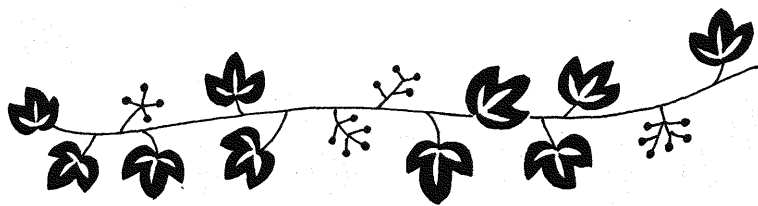
からだの主人公になる

高橋 和子

私が幼児から高齢者までを対象とした、からだの主人公になるための体験学習（ワークシヨップ）を始めてから四半世紀が経つ。「モノ化する身体」「かわれない身体」から脱却してほしいと願って、私はこの一連の活動を「いのちの種まき」と呼んでいる。

内容は臨機応変。乳児には親子のふれあう場面をたっぷり用意する。わらべ唄を口ずさみながらの手遊び、足遊び、全身遊び。幼児には全身での変身遊びや表現遊び。小学生には異年齢集団のむれ遊びや体ほぐし。中・高校の生徒や大学生には自他とのかかわりを紡ぎ出す身体活動。妊婦には呼吸法や体のバランス調整。中高年には基礎代謝量の話や操体法。高齢者には股関節可動域の話や行往坐臥の実習。

また、年齢や性差を問わず「柱」にしてきたことがある。ワークシヨップの設定を受容的で安心のできる場にする。「ひと・もの・こと」「自然」との「かかわり」を創出する。現在の「あるがまま」の姿を認める。到達目標を設定せず「いま・ここ」での「からだの

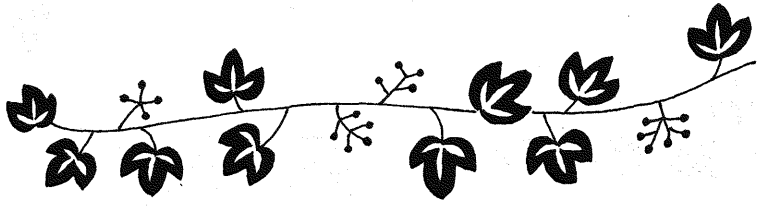


感覚」を大事にする。東洋医学にいう「息食動想」（呼吸する、食べる、体を動かす、感得する）を基底において実習を組み立てる。などなどである。

ところで、この六月、北海道当麻町の「とんがり帽子の保育施設」で行ったワークショップにふれてみたい。そこには、豊かな田園風景が広がり、遠くにまだ雪の残る大雪山が座っている。時間はゆつたり。エゾハルゼミの生を謳歌する声がなぜか本州より先に森に響きわたる。白樺の花粉が空中を飛び交う。ときおりキタキツネが走り抜ける。

参加者は、二歳児から七十二歳までの三十名だった。今回は幼児の参加も多かったので、腕を組み円座になって固まっている人を鬼が引き抜く「芋堀り」、「手遊び」、二人組で相手の背骨を指や手で触ってみる「背骨探検」、お腹のむしの音に聞き耳をたててみたりする「からだの内を感じる」、親子が前後に密着して重なって座り、後ろの人が前の人の胸部に手を当ててみる「心臓にふれる」、二人組になって目をつぶった人を言葉を使わずに安全に快適に誘導する「目をつぶってみて」、子どもの遊ぶ姿を大人がひたすら真似る「子どもの姿遊び」、加えて「ピアノの演奏」と「ダンス鑑賞」という内容で実習を組み立てた。そこへ、ある「特別」が重なることになる。

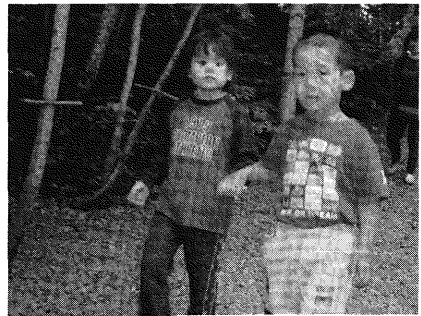
「目をつぶってみて」の実習中、全盲の女兒がおばあちゃんに手を引かれて迷い込んできた。散歩中にステキな建物へ誘われてきてみれば、目をつぶった子どもや大人たちがそれぞれ誘導されて三々五々歩いているではないか。てっきり「これはお仲間かと思った」とおばあちゃんが言う。見つけた私は事情を説明して実習参加を促してみた。そして年中組



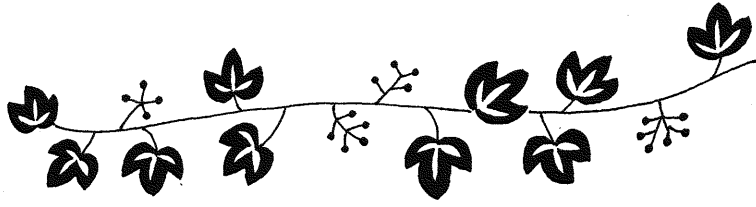
の男児にその女児を任せることにしたのである。

男児は勝手知った園内のことだから得意気に女児を誘導する。手をやさしくそえて歩く。段差があれば立ち止まって足をトントン踏みならして教えている。あちこちに羽化したばかりのセミの脱け殻がころがっている。男児がそっと脱け殻を女児の手のひらにのせる。女児は頷いている。男児が遊具の自動車に女児を乗せる。女児は自分でドアをあけ、身をかがめ座席についてハンドルを回し始めた。遠目に見ているおばあちゃんが「はじめて乗ったのにハンドルがわかるんだ」と驚いて目を細めている。男児は一生懸命にその車を押ししたり引いたり。勢い余って背中から転んでしまつて靴まで脱げた。転んだ男児は泣きもしない。最初の「芋掘り」の実習では真つ先に泣きだした子だった。彼の表情はキリツとしていた。頼もしくも見えた。約束の二十分間が終わる。「ホーウッ」。女児も男児も大きなため息を同時に吐いていた。

ある仕掛けを試してみた。三人の男児を前に立たせる。そして全盲の女児と次々に握手。「どの子があなたを連れて歩いてくれたの」と私が尋ねる。「あつ、この子だ」と三番目の子の手を握った途端に女児が言い当てた。居合わせた全員は大きな拍手。女児は男児に「ありがとう」と微笑む。男児ははにかんで横を向く。しかし、誇らしげだった。拍手の



▲やさしく手をそえて誘導中



顔がみんないい。氷の入ったトマトジュースを飲んだときの女兒の言葉も忘れられない。

「ジュースが減ると氷がカラカラと鳴るんだよ」。研ぎ澄まされている。私は「ああ、いいこと見つけた」とホノボノ色に包まれるばかりだった。

女兒は「とても楽しかった。ありがとうございました」と爽やかに言い残して帰って行った。寄り添うおばあちゃんの目頭が光っていた。偶然の出来事だった。だが必然のようにも思えた。舞台が揃えば参加者にさまざまな気づきもたらされる。目を閉じての滑り台では「スピードがアップ」した。ブランコでは「うしろから」も風を感じた。草原には「光のシャワー」があった。思わず「アブナイ！ ダメ！」と言いついそうになる。「自分」に気づいた参加者もいる。丸太橋を子どもに連れられて目をつぶって渡った母親は「支えているようで支えられている。私にとってかけがえのないものは家族だ」と思ったそうだ。持病のガンとつきあって生活している老婦人が、「人間ってイイな、もう少し人間を生きてみようと思います」と、みなの前で語ってくれた。

四季折々の自然に出合えば人間は「遊び心」を取り戻す。他者とゆったりとふれあうとき「みずから」を振りかえることができる。そんなとき誰もが童心を遊べる。あるがままのスローワークに親しめば誰もが簡単に「からだの主人公」になれる。私の手のひらのセミの脱け殻がそうだと教えてくれた。子どもと自然はいつも偉大な教育者でもあるのだ。北海道の草原で「いのちの種まき」を実感できた私は幸せである。

(横浜国立大学附属鎌倉小学校校長兼務)

運動会と保育学的想像力

太田 光洋

運動会と保育者に求められる想像力

五年ほど前、北海道に住んでいた頃、運動会の観客について調査をしたことがある¹⁾。その結果によれば、一家族あたりの平均観客数は、幼稚園・保育所とも五人を少し超える数であった。もう少し詳しくみると、幼稚園では五人という家庭が最も多く、保育所では三人という家庭が多かった。なかには十五

人という家庭もあり、幼稚園の園庭では観客があふれるのもうなずける結果であった。平均して園児数の五倍の観客がくるとなると、これは大変な行事で、おそらく幼稚園・保育所のもっとも大きい行事といつていいだろう。

考えてみると、運動会は不思議な行事である。この行事に対してはほんとうにいろいろな意見がある。昭和五十年代末頃から幼稚園教育要領・保育所

保育指針の改訂が検討され始め、保育の見直しにと
もなつて行事についても議論が盛んだつた頃、運動
会の内容や方法にもいろいろな意見があつた。しか
し、結論はいまもつてはつきりしないまま、それぞ
れの園でいくらかの工夫がなされ、現在に至つてい
る。

競争の是非が問われたり、運動会そのものの不要
論が出るなどして、順位をつけることや競争的な種
目をやめる園も現れ、なかには運動的そのものを廃
止する園さえあつた。けれども、運動会という行事に
ついて考えれば考えるほど、こうしたやり方は想像
力に欠けるのではないかと思つている。それは理屈
のうえでは正しいかもしれないが、みんな満足でき
ないのだ。運動会は、いろいろな人の思いや期待が
込められているから、その位置づけや取り組み方が
難しいのだろうが、子どもが育つ環境と合わせて、
その思いや期待に馳せる想像力が保育者には求めら

れているのではないだろうか。

運動会と子どもの事実

保育者にはどんな想像力が求められているのか。
多くの園が、運動会を見直す過程で、これまでの
運動会での子どもの姿を振り返つて思う。か
つて保育者だつた筆者にもこんな思いがある。

引き締まつた真剣な顔。力を合わせて走る子ど
もたちの姿。バトンをつなぎ、まっすぐ前を見つ
めて走る子どもたちの姿を見ていると、なぜかわ
からないが涙が出てくる。自分が保育者だつた
頃、運動会の度に同じ気持ちになつた。

保育者だつたから……そう思つていたが、大学
に勤めるようになって、あるいは親として参加
した幼稚園や保育所、小学校の運動会を見ても
やっぱり同じなのだということに気づいた。子ど

もたちの一生懸命な姿を見て感動する。どの親も同じだろうと思う。

多くの場合、集中的、意識的に行われる運動会の取り組みを通して、子どもたちは成長し、その姿に触れて親や家族は感動する。子どもたちはそれを受け止めてどこか誇らしげで、自信をつけていく。そういう手応えを保育者は感じてきている。その確信に保育者は自信をもってほしい。

運動会に懐疑的になる保育者だっているのも事実。観客が多いので、「見せる」ことがエスカレーターすると無理しなければならず、それが嫌だと感じる保育者も少なくない。

「運動会の練習ばかりでおもしろくないから幼稚園に行かない」という親からの電話。運動会が

近づくくと、多くの園ではその練習にかなりの時間を費やす。ならば方から行進、体操、かけっこ、団体種目、親子競技などの競技や演技。なかにはマーチングまで取り入れるところもある。子どもだけでなく、保育者だつてうんざりすることがある。

保育者、あるいは幼稚園や保育所がカッコつけすぎと思うことがある。「うちに入れば子どもはこんなに立派に育ちますよ」と。こうすることが、子どもの事実を隠していないか。ほんとうは大切にしなければならぬ子どもの遊びや生活を壊していないか。保育の原点に立ち返って、保育者に考えてほしい。

「見せる」との関係があるが、観客について。冒頭にも書いたとおり、なかには十五人もの大応援団

を擁して運動会に乗り込む家族だっている。北海道にいた頃、へき地保育所や季節保育所に行くと、十五、六人の子どもたちの遊ぶ姿を見るまわりのおとなのまなざしの優しさを感じた。子どもたちは地域の宝物なんだ、と。

およそ教育的でないといわれるかもしれないが、運動会ではお母さんはもちろん、お父さん、きょうだい、おばあちゃんにおじいちゃん、それに近所の人までやってきて、子どもの姿に目を向け、自分たちも参加して、お祭り気分。筆者の経験でいえば、お昼にはお弁当を広げ、ビールまで持ち込んで、楽しい時を過ごすという地域も少なくない。子どもたちの行事はいまでも、地域の〈祭り〉であり、家族の〈祭り〉である。

運動会は地域社会に欠かせない行事として定着してきたものである²⁾。昭和三十年代に幼稚園の園庭整備が急速に進むにつれ、それまで小学校への招待や

同時開催が多かった幼稚園の運動会は独自に行われるようになった。

〈保育学的想像力〉による

子どもを中心に据えた運動会を

こうした事実を受け止めながら、保育者は運動会を構想する必要がある、それを子どもを中心に考えることこそ〈保育学的想像力〉といえると思う。子どもを取り巻く人々の思いを含め、子どもの生活まわりのことを引き受け、保育を構想することである。

遊びについての従来の知見からいえば、運動会の競技のようなゲームは、発達的には幼児期のごっこ遊びに続いて楽しめるようになる遊びであり、幼児にとって簡単ではない。でも、運動会の取り組みを通して子どもが育つとい



う実感をもっているのなら、その実践から子どもに適切なかたちを探るのが保育者の仕事ではないか。そう子どもが教えてくれているのではないか。だとすれば、幼児期の子どもの遊びゴコロにかなった種目も、競争的な種目もあっていい。

そうした中で、子どもの姿を親や地域の人々に伝え、その未熟さも、かわいさも、これから育てていかなければならないことも知ってもらうことが必要であろう。保育者が、子どもの事実を覆い隠してしまっていないか。保育ではよく見る子どもの姿だと思いが、筆者の長男にも次のようなことがあった。

わが家の長男は二年間通った幼稚園の頃、体操をしない子どもだった。当時から背の高かった彼は他の子どもたちが体操している間、いつも後ろの方でずっと立っていた。親として自分の子ども

だけが体操をしないことはあまり気にならなかったが、その間彼がどんな気持ちでいるのかは気になったものだった。

こうした子どもの姿を、ありのまま受け止めてくれる保育が必要ではないか。こういう子どももいる、そしてそれでいいのだということを伝えることが、子育てを楽にする。子どもの事実を伝えることが、地域の皆で子どもを育てていく土壌を育むのではないかと思う。

そして、地域の人々。地域の教育力の再生が叫ばれ、さまざまな試みがなされているが、子どもが暮らす幼稚園や保育所が地域に開かれ、解体しつつある地域を結び直すことはできないか。これからの保育は、幼稚園や保育所が閉じていては不可能である。幼稚園や保育所が子どもを中心に据えながら、地域に発信し、地域をつなぐ存在になることが求め

られる。運動会はそれを考え、実践するもつとも適した行事ではないだろうか。

運動会は難しい。が、運動会が抱える課題や難しさはけっして矛盾するものではないと思う。子ども
の事実、実践の積み重ね、保育の歴史、幼稚園や保育所の役割といったことを考え合わせる（保育学的想像力）をもってすれば、新しい運動会のかたちを構想できると信じている。それが実践を通して考え、新たな実践をつくっていく保育者の保育者たる専門性なのではないか。
（九州女子大学）

注

- 1) 太田光洋・金田正一・相澤伸幸ほか「幼稚園と保育所における運動会の観客調査」旭川大学女子短期大学部紀要30、19—32、二〇〇一
- 2) わが国の運動会は、その原型といわれる海軍兵学校で開催された「競闘遊技会」（一八七四年）にはじまり、兵

式体操の学校教育への導入（一八八五年）、初等教育における体操の必修化（一九〇〇年）などと並行して、日露戦争後の地方改良運動と連動するかたちで地域社会に欠かせないものとなっていった。小学校の運動会に招待されて参加していた幼稚園も大正期から独自で行う園が始め、昭和三十年代には園庭が急速に整備され、多くの幼稚園で独自の行事として行われようになった。ただし、内容は小学校で行われていた（競技会的）なものであった。

参考文献

- 前橋明・馬場桂一郎『楽しい子ども運動会』大学教育出版、一九九二
- 中川洋一『運動会の定着』『北海道教育』144、一九九九
- 吉見俊介ほか『運動会と日本近代』青弓社、一九九九

“うんどうかい”から“運動会”へ

甲斐 久美子

“もうすぐ運動会！”というこの季節を迎えると、私はそわそわとして落ち着かなくなっていたことを思い出します。毎年必ずやってくる行事の一つであり、私の中にそのイメージが固定化してしまっていたこと、また、保護者の方を招いての行事ということとで、特別にそわそわしていたのだらうと思います。一方、初めてこの季節を迎える子どもたちはどうであったかという……、「そとでおべんとうたべるんだよね」「みんなでおでかけするんでしょ」

と、それぞれに“とくべつ”なイメージを抱き、そわそわと過ごしていました。そして、“もうすぐ”に向けての準備や、そのような雰囲気の中で盛り上がる“うんどうかい”“ごっこ”など、初めて目にする周囲の変化に心を動かし、またひと味違う“そわそわ”を感じていたようです。

三歳の子どもたちは、そんな日常からどのように“うんどうかい”を思い描いていくのでしょうか。“うんどうかい”から“運動会”へ、日常か

ら非日常に移行するこの行事を初めて経験する三人の子どもの様子を思い起こし、彼らにとっての「運動会」をここで改めて見つめてみようと思います。

さいたま市・大宮に程近い住宅地にある私立幼稚園。入園当初のY（三歳・男児）は、大好きな兄のいない（前年度卒園）幼稚園に不安な気持ちを抱えながら保育者（私）のそばで一日を過ごしていました。母親から離れ難い日もあり、保育者に顔だけ見せて家へ帰ることもありました。たたかいごっこがなにより好きなYは、誰かと一緒に遊びたいという思いはあるものの、思い通りにはいかず、物足りなさを感じていたようです。

自宅が近く登園時に一緒になることがあるT子には、母親同士のかかわりもあって次第に親しみをもつようになっていきました。T子の何気ない優しい言葉や行動に、安心して自分をだせるようになってきたY。T子が大好きなSにも気持ちがあくようにな

り、いつしか三人で過ごすことが当たり前になっていきました。「○○レンジャーごっこやろう！ほくが○○で、Tちゃんは△△ね。Sくんは□□だよ」。自分の誘いを快く受け入れてくれる二人に気持ちがあぐれ、登園するとすぐに声をかけるY。T子もSも、「なりきる」面白さを新鮮に感じ、自分たちの家をつくったり園内のあちこちを巡り歩いては、そのやりとりに夢中になっていきました。不安な園生活において、ようやく見つけたYの抛りどころとなる遊び、そして友だち。夏休みを迎える頃には、「おはようございます！」と、保育室をめざして走って登園するようになっていました。

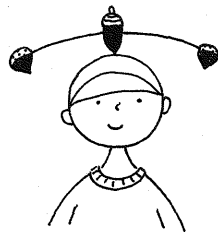
さて、彼らにとって初めての運動会シーズン。小学生の兄の運動会を見たYは、「よいいどん、するんでしょ。がんばれーっていうんだ」。兄の姿が強く心に残っていたのでしよう。保育者や友だちに目を輝かせて話すYは、運動会を見たことがある、誰

よりも自分は知っている、とても誇らしそうにしています。私はそのイメージがどのようにY自身
の“うんどうかい”につながっていくだろうと期待
していました。

国旗作りや入場門作りなど準備がすすんで、運動
会ムードが園内に漂い始めると、昨年の運動会を思
い出した年中・年長児によって“うんどうかい”ごっ
こが始まります。その傍らで、いつものようにたた
かいごっこをしている三人、なんとなく目を向ける
ようになり、それぞれに心を動かすようになってい
ました。

そんな頃のある日、ダンスを楽しむ子どもたちの
活気に満ちた雰囲気に興味をもったSは、「ぼくも
やりたい」と二人を離れダンスに飛び入り参加。
Yは、「S! もうぼくのうちにこないで! こん
どから〇〇かしてあげないから」と、大声で叫び
懸命に呼び戻そうとしますが、夢中で踊るSには一

向に届きません。「ぼく
はやらない。Sなんても
うしらないつ。Tちゃ
ん、ふたりであそぼ
う」。Sを見て気持ち



揺らいでいるT子に気づいたのでしよう、T子を行
かせまいと必死のYでした。T子は、そんなYの表
情を見て何も言わずにその場に留まりました。

Yには“ダンスなんていやだ、おんなのすること
だ”という思いがありました。おまけに大好きな友
達を自分から引き離してしまうなんて、ダンスのあ
るうんどうかいなんて……。Yにとっては“こんな
はずでは”という思いが重なり、ぶいっと顔を背け
たくなる“うんどうかい”となっていきました。一
方、ダンスを始め、かけっこやそのほかの“うんど
うかい”ごっこにも気の向くままにかかわるSにと
っては、“おもしろい! たのしい!”でいっぱい

“うんどうかい”です。奔放なSを目で追うT子、一緒にやってみたいという気持ちは膨らむものの、Yのことも気にかかり、もどかしい毎日を過ごしていました。運動会を間近に控え、様々な気持ちを抱えて過ごす子どもたちの姿に、私は心のどこかで焦りを覚えていました。大人の期待する子どもたち全員が楽しく参加する“はず”の運動会をやはり意識している自分に、そして、楽しくかわるSに安心している自分にこの時気づかされました。

“うんどうかい”が、“運動会”になること。保育者として子どもに伝えたいことはあるとしても、それぞれの子どもが感じる楽しさがあり、イメージがあり、それは日々の遊びを通して膨らんでいきます。それぞれのありのままを感じとって、その楽しさが続くような雰囲気は何よりも大切にしたいものです。もちろん「？」という気持ちを安心してさせる雰囲気も。子どもたちの心動くその時を捉えられ

るよう柔軟な姿勢で待ち、一人ひとりの遊びや三人の関係をつまみおす機会の一つとして、彼らとその時期を過ごそうと私は子どもたちの気持ちに触れたい直しました。

ある日の午後、T子は靴箱の前に立ち、踊っているSの姿をじっと見ていました。私はT子に「いいおいで。先生はY君と一緒にいるよ」と、さり気なく声をかけました。はっとした表情で私の顔を見たT子、しばらくうつむいていました。「……うん」T子は園庭へ飛び出し、Sの側へ駆け寄りました。私はT子の姿に呆然とするYのそばに寄り、「一緒にいようね」とつぶやきました。それどころではないYは返事もしません。楽しそうな二人の姿を黙って見つめていました。

運動会までの数日、T子は何か吹っ切れたようにSとダンスに参加、好きな音楽にのって心とからだですべての雰囲気を存分に楽しんでいました。そして、

いつものYとのごっこ遊びにも変わらずに夢中でした。二人がダンスに参加している間のYは、離れたところからちらちらと見ていたり、自分の遊びに必要なものを黙々と作って（待ちながら）過ごしていました。二人を横目で見るとYを私も横目で見つつ、日々揺れ動く気持ちと向かい合いながら大きくなっていくのだなと感じていました。

運動会は園から徒歩五分程の小学校校庭で行われます。場所を移しての運動会は、子どもたちにとってはそれだけでも「とくべつ」な出来事です。当日、Yは家族と一緒に、緊張した面持ちで校庭にやって来ました。それだけでも私は嬉しく、「おはよう！」と思わず声を上げてしまいました。「……おはよ」と、もじもじしているY。プログラムが進み、年少組のダンスが始まると、Yは私にびったりとくっつきました。そして……、からだを動かした

のです。T子もSも「Yと一緒に」がとても嬉しいようです。大はしゃぎでした。なぜYは私のそばにいたのでしょうか？ 動きがわからなかったからでしょう、と母親の笑いをこらえたコメントがありました。私はT子やS、家族、保育者への「ほくはやつてるぞ」というアピールのように感じました。あるいは、いつもとは違う状況に、そうせずにはいられなかったのかもしれない、一緒にしなければ今日の居場所はないとYに感じさせてしまったのではと、一方で思わずにはいられませんでした。

Yにとって、子どもたちにとって、初めての「運動会」はどのような日となったのでしょうか。子どもたちの目には何が「とくべつ」に映ったのでしょうか。いつもとは違う状況に、またはプログラム外のところ「とくべつ」を見つけたでしょうか。当日までにそれぞれに感じた楽しさや面白さ、戸惑いやもどかしさといった心の動きが、後にその日を「と

くべつ”にするのかもしれませんが。

運動会を終え、それから三月まで“運動会のダンス”に興じていた子どもたち。あの日の“とくべつ”な雰囲気を思い出しながら、いつもの遊びとして楽しみました。しかし、Yはダンスには見向きもせず、過ごしていました。Yなりに“とくべつ”に感じた“運動会”であつただらうと思います。

子どもにとって心を解放させてからだを動かす、友だちと一緒にルールのある遊びをすること、またその中で様々な気持ちを味わうことはとても大切な体験です。どの年齢においても、うまく“みせる”ための練習の日々をおくるのではなく、その時々々の面白さが当日につながるように、その過程を見つめていきたいと思っています。また、“うんどうかい”“ごっこが盛り上がるその傍らで、いつもの砂遊びやモノ作り、〇〇ごっこに没頭する子どもたちにも変わらずに目を向けたいものです。その時間が保

障され充実してこそ、新しい経験が豊かになっていくのではないのでしょうか。

運動会を待つ大人側にとって特別なイベントであることはさておき、子どもたちにとってその日はどんな“とくべつ”な日となるのか。私たち大人とは違う、粹のない“うんどうかい”を楽しみながら、どんな“運動会”を創り出したのか。そして、その日を経験して感じた“とくべつ”はどのように“いつも”へとつながっていくのか。それぞれの“運動会”を通して、新たな何かが始まることを期待しながら子どもたちとその季節をゆつたりと過ごしていきたいと改めて思います。日々、揺れ動く子どもたちの心に気づき、寄り添える大人でありたいと願っています。

今年、彼らにとって三回目の運動会です。Y・T子・S、それぞれに新しい“とくべつ”に出会える季節でありますように。

小学校と運動会

井ノ山 正文

運動会って

校庭から子どもたちの歓声が聞こえてきます。一年生が玉入れの練習をしていて、どうやら赤組が勝ったようです。次の時間は、高学年の組体操の練習です。笛の合図や音楽に合わせて倒立をしたり、

一緒に組んだ相手の子を肩に乗せたりしています。どの子も練習に一生懸命です。でも、時々教師の厳しい声も響きます。熱心な指導と力の入れ過ぎ、どこで折り合いをつけるのかは微妙なところです。さて、小学校の運動会は年間行事計画の中でも最大のイベントです。一日で全学年の子どもたちの体

育的活動の取り組みを保護者や地域の方たちに参観していただくのですから、当然といえるでしょう。

また、年間を通じて運動会の日のように多くの保護者の方たちが集まる日も少ないと思います。早朝から学校の門の前に並んで場所取りをするお父さん。

場所取りは、なぜかお父さんが殆んどです。開門と同時に、ダッシュでお気に入りのポイントへシートを広げて一段落です。多くの場合は、徒競走のスタート、ゴール地点が人気スポットです。

運動会の最中は、ビデオやデジタルカメラを持って我が子の撮影に熱心です。後でゆっくり観るのでしょうが、カメラのレンズ越しに見るよりも、目の前を力一杯走る姿を脳裏に焼き付けておくほうが良いのでは、と思うのです。しかしながら、運動会シーズン前後のテレビCMを何回も見ていると、「うん、今年はこのビデオで思い出作り！」となるのでしょうか……。

徒競走以外には、各学年とも表現（団体演技）や団体種目に取り組みます。表現では、低学年は創作ダンス的なものが比較的多く、中学年では「ソーラン節」や「花笠音頭」、「エイサー」などの地域色の豊かな踊りに取り組むこともあります。団体種目では、低学年では「玉入れ」や「置き換えリレー」などがあり、中学年では「棒引き」や「障害物競走」などがあります。また、高学年では「騎馬戦」や「棒倒し」などが一般的だと思います。

しかし、なんとと言っても注目度一番は、色別対抗リレーになります。各学年・各クラスからリレーの選手が選ばれ、練習を繰り返し当日に臨みます。小学校でバトンを用いてリレーを行うのは中学年からですが、色別対抗リレーでは低学年の子どもたちもバトンを持って走ります。運動会自体が色別で得点を競う仕組みになっていきますから、時としてはリレーの結果が勝敗の行方を左右することにもなまり

す。応援係の子どもたちも「フレー！ フレー！！
○○組！！」と必死に声を張り上げます。

そして、閉会式での結果発表や講評を終えて運動会は終わります。

運動会のはじまり

このような運動会がいつ頃から始まったのでしょうか。記録されたものによれば、日本で最初の運動会は、一八七四年（明治七年）に東京の海軍兵学校の寮生たちによる「競闘遊戯会」であったとされています。行った種目は、高跳び・走り幅跳び・徒競走などです。この頃徒競走は、ピストルの音で揃って飛び出すので「雀の巣立ち」ともいわれていたそうです。これ以降、一八七八年には札幌農学校で、一八八三年には東京大学で運動会が開催されましたが、まだまだ一般的ではなかったようです。

その後、学校行事として運動会が普及したのは、

一八八五年（明治十八年）に、第一次伊藤博文内閣の文相となった森有礼が、ドイツの教育思想を背景に学校令を制定したことが大きく影響しているようです。森有礼は、明治維新後の日本各地の学校を巡視する中で、体操や唱歌の重要性を説いています。

この時代の背景を考えるならば、富国強兵・殖産興業・文明開化の流れの中で急速な近代化と教育の普及の一環としての運動会の位置づけが見えてきます。

因みに運動会には万国旗がよく揚げられています。学校ごとの運動会が多く実施されるようになった大正時代に定着したようです。今では、「何となく賑やかでいい」などの感覚で揚げられています。これはこれで歴史があるようです。また、保護者来賓の種目としてよく行われる「綱引き」、そして現在も多く小学校で実施されている「徒競走」は、明治時代からの代表的な種目であったようです。

運動会さまざま

このように考えると、運動会は国の施策で行われてきた感がありますが、それだけでは今日までの隆盛を説明できません。なぜ、現在も運動会が学校において重要なかを考えると、運動会が「地域の祭り」の要素をもつからだと思えるのです。明治期から大正期にかけても学校の児童数を大きく上回る観衆が運動会の参観に来ていたようです。当時は花見遊山的な気分、「村祭りがやってきた」の雰囲気でも多くの人が歓声を送ったことでしょう。当時は、学校が文化の発信地であり、地域の象徴でしたから尚更のことと考えられます。

現在でも、運動会の日は「ハレの日」なのだと思います。運動会が近づくにつれ家族の中では緊張感が高まります。当日のお弁当や子どものコンディショニングに気をつかいます。そして、おじい

ちゃんやおばあちゃん、親戚までもが駆けつけます。子どもにとっては、ワクワク感と緊張感を味わう数少ない場面です。そして、自分を絶対的に応援する家族がいます。

地域の人々にとっても、現在の学校が失った「牧歌的な学校の姿」を垣間見る機会になっているようです。来賓席や敬老席には、毎年の運動会を楽しみに参観される方々がいます。このような期待感を学校は感じていません。ですから、通常の体育授業では扱わない、むしろ「伝統的」といった方が良いかもしれない様々な種目を、時間をかけて練習するのだと考えられるのです。

しかし、子どもたちはどのようなことであれ運動会を楽しんでいます。運動会後の感想で、A君は「きょう運動会がありました。と



でもあついひでした。お母さんとお兄ちゃんと二人のおばあちゃんが見に来てくれました。ときよう走は一番目でした。どきどきしたけど、いっしょうけんめい走りました。四位でくやしかったです。午後は、はじめてやったおうえんだんでした。のどがかれるほど、練習しました。本番では、ちよつとどきどきしたけど、じょうずにできました。きようは、ちよつとつかれたけど楽しかったです」と述べ、B

さんは「竹取物語（棒引き）では、二本差で負けました。八十メートル走では三位でした。本気をだせませんでした。くやしかったです。エイサーは、練習よりもじょうずにできました。足の高さ、声のおきさもしつかりできたと思います。リレーは、二番目に走った子がバトンをおとしてしまいぬかされたのでしまいました。結果は四位です。あともうすしだったのに、と思いました。でも、最後は赤組が勝って、とてもうれしかったです」と述べています。

自分の力を出し切ることや目的に向かつて努力することなどが、運動会を実施するときの目標になっていますが、子どもたちの様子を見るとこの点は十分達成できていると思えます。

違いを認めあう運動会へ

しかし、どの子も同じような運動能力をもっているわけではありません。むしろ、みな違っているのが実態です。ですから、表現（団体演技）を除く徒競走を始めとする様々な種目には勝敗がつかず。この勝敗をどのように受け止めるのが運動会の別の側面としてあります。教師の立場から考えると、この点を十分に配慮した指導が必要となります。「勝つことのみ」を目的として取り組ませるような指導は減少しているとは思いますが、このことが目的化してしまうと子どもたちに軋轢が生じます。

このようなことがありました。以前勤務した学校

で、四年生は毎年「台風の目」という団体種目に取り組んでいました。その年もこの種目に取り組みことは既定方針でした。台風の目というのは、一本の棒を四人で持ち、置いてあるカラーコーンを回ってくる種目です。ところが、右足に麻痺が残るC君のことが話題になりました。C君は、走ることができませんが時間がかかります。どのように対応するかという話になったとき、教師間では様々な意見が出ました。「徒競走を含めて、途中から走らせる」、「参加できるものだけにしたらどうか」などです。なかなか、結論はでませんでした。

C君と一緒にクラスの子どもたちと相談しました。子どもたちもなかなか意見が出ませんでした。ある子が「やっぱり、勝ちたいよな」と言ったところから、話はどうどん出してきました。作戦を立てようとか、教師と同様に途中からという意見も出しました。しかし、最後はC君が「みんなとおんなじにや

りたい」と話したことでまとまりました。「勝ちたい」という気持ちと「みんなで」という気持ちの折り合いができてきたのです。当日は、力の強い子がC君を支えるように走りきりました。でも、支えられたのはお互いだったと思うのです。

運動会を楽しむために

運動会は、やはり「地域の祭り」だと思っています。運動会という日に多くの人が出会い、子どもたちが力一杯演技し、家族でお弁当を囲む和やかな日があってほしいと思います。そのためには、学校は子どもたちの運動会への取り組みのプロセスに子ども同士の関係性を育てる配慮が求められていますし、保護者の方々は我が子のみでなく「子どもたち」を温かく見守る視点が必要なのだと思うのです。多くの小学校で楽しい運動会が開かれますことを……。

(新座市立西堀小学校)

日常の中の運動会

佐藤 寛子

長い夏休みを終え、子どもたちとの久しぶりの再会。また新鮮な気持ちで保育が始められそう！と、うきうきしていた二学期のある日のこと。

「ねえ！ せんせい、わたしたちは、どんなダンスにする？」

と、A子が聞いてきた。運動会のダンスの話らしい。

十月第二週の土曜日に予定されている園の運動会は、実にシンプルなものである。つなひき、玉入れ、リレー、三歳児の親子競技、四・五歳児の保護者種目、おみやげ競争、それに各学年ごとの遊戯。お弁当なしの午前中で終了。

プログラムを見ると、何年か前にタイムスリップしたような気持ちになる。そのうえ、場所も、

真ん中に花壇のある園庭のみ。実にこぢんまりとしたものだ。都内では珍しく緑の多い園庭は、その奥に高台を配し、全体ではかなり広い。けれど、運動会ときは、その高台を除く園舎に面した敷地のみを使用する。

お弁当がないことについては、保護者の評判はよい。しかし、場所に関しては、賛否両論、あるいは最近では反対意見の方が多いかもしれない。隣接する小学校の広い校庭を借りたり、小学校の運動会と合同で行ったりすれば、子どもたちも広い場所でのびのびからだを動かすことができるし、保護者も、ゆったりと観戦することができる……といった意見がその大半である。

「運動会」というハレの日を、日常から切り取って考えたとき、保護者の意見はもつともであり、そうしてしまうことに迷いはないであろう。けれど、

秋の日の一日を、わざわざ「運動会」と称して、保育の日常に盛り込む意味は一体何なのであるのか？

A子の言葉をきつかけに、早速今年も五歳児の子どもたちと、どんなダンスにするかを考えることにした。あらかじめ用意しておいた曲を流してみると、

「いいねー」

と言いながら、数人でカセットデッキに耳を寄せ聴いている。子どもたちがよく行くテーマパークで、パレードのときに使われたことがある曲らしい。知っている子どもも何人かあった。

「Yせんせいとはね、こんなふうに見てみたらいいかな？　って考えたんだけど……」

と、言いながら、隣の組の保育者とアイデアを出し合い考え、汗を流しながら練習した振りをつけ

て踊ってみた。すると、B子が一緒に踊りながら、「それよりも、こうやった方がいいんじゃないかな？」

と言ってきた。

私たちの動きよりも、ずっと曲のイメージにピッタリなうえに、全体の流れともマッチしたその振りは、すぐに周りの子どもたちにも受け入れられた。

こうして、数人の子どもたちを中心に、ダンス「イルミネント」は、保育の中で徐々に広がっていった。遊戯室や廊下、園庭で、毎日、曲に合わせて踊る五歳児の姿を、三・四歳児が興味をもって見つめている。それを知って知らずにか、得意気に踊る五歳児は、その人数を少しずつ増やしていった。そして、全員で三〜四回合わせて踊ってみたところで、運動会の本番となったのである。

当日は、完璧なダンスとまでは、とても言えな

かったが、園児席で、五

歳児と同じようにからだ

を動かしてみている三・

四歳児の熱い声援を受

け、踊り終えた後の五歳

児の表情はとても晴れやかであった。翌週からも、

「イルミネント」は、園のどこかで流れ、それに

合わせて踊る子どもたちの姿がそこかしこで見ら

れた。保育者も、学年を越えて、入れかわり立ち

かわり子どもたちのダンスの輪に加わった。子ども

たちとともに楽しみながら、五歳児が三・四歳

児に、丁寧に振りを伝える様子を見て、ほほえま

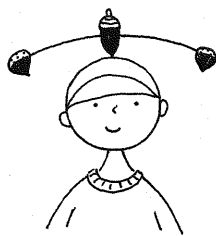
しく嬉しくなった。

冬休みを終え、三学期になっても「イルミネン

ト」は繰り返された。そして次第にダンスの中心

が五歳児から四歳児・三歳児へと移っていった。

こうなってくると、運動会の演目であった「五歳



児のダンス」は、もはやみんなの遊びのひとつになつたといえるだろう。

そして、また翌年の秋、新たな五歳児が、「ねえ！ せんせい、わたしたちは、どんなダンスにする？」

と続くのである。

先日の園内研究会でのことである。その日は、四歳児の保育について事例を中心に話をすすめていたのだが、私たちの会話の中に、「つなぐ」とか「つながる」といった言葉が繰り返し出てくることとが話題になつた。「つなぐ」「つながる」といった言葉をキーワードに研究を進めているわけではないのだが、私たちの口から自然に出てくるこうした言葉は、保育の中で大切にしていることと、関連しているのだろうか。

「運動会」の位置づけは、それぞれの園によって

異なるであろう。来年度の入園予定者のことをも視野に入れ、運動会を保育公開の場とせざるを得ない場合もあるだろう。また、日常とは切り離し、「ハレの日」だからこそ体験できることの意味を追求していくこともひとつであろう。けれど、運動会も日常とつながっている一日なのだ。そして、子どもたちは、一つひとつの体験を、生活の中で遊びを通してつなげていこうとしている。

運動会の玉入れや遊戯で、子どもたちが立つ位置をわざわざラインで示さないのも、ここでの大切にしていることのひとつである。これもまた、日常の保育と大きくつながっていることだ。

降園前の集まりに、椅子を大きく円に並べるときにも、三歳児の初めから、床にしるしをつけて並べやすくすることはしていない。

登園してから思い思いに遊び始める子どもたち



が、一日の最後にみんなで顔を合わせる大切なこの時間。保育者は初め、子どもたちに声をかけながら、せつせと椅子を円に並べる。毎日の繰り返しの中で、だんだんと子どもたちが自分たちで椅子を並べるようになってくるが、初めのうちはでこぼこしていて、きれいな円には程遠い形でしか並べられない。たとえば、保育者がきれいに並べても、腰掛けて話を聞いているうちに、前にどんどんでてくる子どもがあつたりして、なかなか整然とならない。ところが、一年二年と生活を積み重ねてくるうちに、隣の友達との距離を感じ、みんなと暮らす意味を知り、前に出たり後ろに引つ込んだりせずに整然と並べるようになってくる。

四歳児の玉入れで、ちょっと苦労しながら、でも、きれいな円ができてくる過程は、友達との違いを感じてきた子どもたちが、少しずつ仲間と暮らす楽しさを理解してきた姿であろう。

先生の周りに団子のように集まってうごめいている三歳児の遊戯もまた、保育者を抛り所にして身を寄せ合って過ごしている三歳児の日常そのものである。

日々の生活の場である園庭で行う運動会。園児席の目の前で繰り広げられるそれぞれの子どもの様子は、「ハレの日」ではあるが、日常の子どもたちの姿である。

そして、幼稚園生活最後の運動会で、五歳児は、仲間との一体感をより身近に感じると同時に、三・四歳児の様子を見て、今まで自分たちが歩んできた時間を振り返るのだろう。そして、三歳児、四歳児にとって、五歳児の姿は、未来の自分たちにつながる姿なのだろう。

さて、こうした「運動会」の意味を、どのように

保護者に伝えていけばよいのかが、私たちの一番の課題である。

すぐに明確な答えが出ない保育の営みは、今の社会の早さに合わないのだろうか？

「もう少し待ってみてください。後から振り返ってみると、ここで大切に行っていることがきつとわかっていただけだと思いますから」などというのんびりした態度では、きつと伝わらないのだろう。

「運動会」を、日常の一コマと考えるのならば、「運動会」の意味を伝えることに加えて、日々の子どもたちの姿をさらに丁寧に伝えていくことが大事なかもしれない。

子どもたちとのかかわりの中で、私たちが得ている豊かな時間を、少しずつでも保護者と共有していくことが、私たちに課せられたもう一つの仕事なのだから。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

子どもたちの装い

—十七世紀オランダの親たちの鏡像—

小林 頼子

子どもの成長は速く、同じサイズの服が着られる期間は短い。だから、妹や弟が姉や兄のお下がりを着たり、年齢の近い近隣の子どもの間で服が交換されたりもする。幼い時分に、だれもが一度ならず経験した子ども服のリサイクルである。かくして、子どもの服は、とりわけ「もの」が貴重な社会では、使い回しが激しくなり、大人服に比べ、資料として後世に残ることが少なくなる。往時の子ども服の様子を探る際、絵画の資料的価値がきわめて高くなる所以である。もちろん、画家のまま

ざしは常に社会化されており、たとえ写實的に描かれた作品といえども、当時のありのままを伝えるわけではない。それでも、写實性に秀でた絵画を多数生み出した十七世紀オランダに関しては、慎重に腑分けをすれば、子ども服の実態を比較的正確に把握できる状況にある。そこで、以下、ごく簡略に十七世紀オランダの子どもの装いを成長に合わせてたどってみることにしたい¹⁾。

乳児期については、十七世紀オランダを代表する画



- 1 (左) レンブラント《ベッドの母と子》、素描、1635—36頃、ロンドン、コートールド研究所
- 2 (右) レンブラント《立つ練習》、素描、1635—37頃、ロンドン、大英博物館

家、レンブラント・ファン・レイン(1606—1669)が一六三〇年代に描いた三点の素描を参考にしよう。²⁾一点には、ベッドに座る女性とその胸に抱かれた幼児のいる情景が描かれている(図1)。一六三三年六月にレンブラントと結婚した妻サスキアは、病弱な女性で、床に伏すことが多く、早くも一六四二年六月に二十九歳の若さで亡くなった。一六三五年、三八年、四〇年、四一年にもうけた四人の子どもも、第一子は二か月、第二、三子は二週間で早世し、成人したのは亡くなる九か月前に生まれた第四子のテイトゥス³⁾だけだった。図1は様式的に一六三五一六年頃の制作と推定されるので、ちょうど第一子が誕生した頃の作品になる。⁴⁾

帽子をかぶり、ケープに包まれた子どもは、よく見ると、首から下をすっぽりとおくるみで包まれている。当時の医学書は、生まれたばかりの乳児は、ヘソ布とおしめをし、おくるみにくるむよう勧めている。⁵⁾ミイラのようにならぶでグルグル巻きにされるなんて、乳児にははなはだ難儀なことに違いないが、オランダは寒い国だから、



3 レンブラント《歩く練習》、素描、1635—37頃、ロンドン、大英博物館

風邪を引かさない配慮が必要だった。さらに、奇形を予防したいという親の願いも強かった。まっすぐに背筋の伸びた姿勢は、とりわけ中・上流社会に生きようとする者には欠かせない身体的要件だった⁶⁾。だからくだんの医学書には、脚の間にオムツを入れてはならない、といった細かい指示も併せて記されている。

乳児の骨格がしっかりしてくるにしたいが、まずは両手が、続いて生後三か月を過ぎる頃には脚がおくるみから解放される。そして手足が自由に動かせるようになれば、やがて、立つ練習、そして歩行器や大人の手を借りての歩く練習が始まる。レンブラントには、ちょうどその頃の幼児の姿を描いたステキな素描もある(図2、3)。どちらも制作されたのは一六三五—三七年頃。三五年に生まれた第一子が生後二か月、つまり立つことはおろか歩くことさえなく逝ったことを思えば、素描の飾りのない日常性がかえって胸を打つ。

両の手首を大人に掴まれて、おぼつかないながらもバランスをとり、一歩一歩、脚を前に踏み出そうとする幼

児(図3)。両側の女性は、ほら、もう一步、こわくないよ、と幼児を励まし、元気づけているかのようだ。幼児は、右側に立つ女性の手が示す方向をまっすぐにみつめている。真一文字に結んだ口元からは、「自立」に向けてのやみがたい意思が感じとれる。とはいえ、歩き始めの幼児は、転んで怪我をする危険にいつだってさらされている。そこで、頭部には、万が一の転倒のショックをやわらげる分厚い鉢巻のようなものが巻かれている。着衣の方は、レンブラントの赤チヨークの簡略なタッチからは必ずしも判然としないが、どうやら、長袖の上着に前垂れ、長いスカートにエプロンを重ねているようだ。この幼児が男か女かは判別できない。当時にあつては、一定の年齢に達するまで男女ともスカートを着用したからだ。

それでも、ほかの徴から、スカートをはいた幼児の性別を判断できることもある。たとえばファン・ラーフェステイン(1572頃—1637)の描いた幼児は、間違いなく男児である(図4)。鍔つばつきの帽子はもっぱら男児のかぶ

るものだったからだ。すでに転ぶおそ懼れもなくなるほどに成長し、鉢巻を鍔つばつき帽子に替えたのであろう。依然としてスカートをはいているが、共ぎれの胴着たねぎともども、白地に黒の植物パターンをあしらった布地か、何ともシックで、美しい。その装いは、幾層にも重なる襟のレース、袖口の折り返しおひだりのレース、両腕のプレスレット、斜めがけにした金のメダルとあいまつて、親の豊かな暮らしぶりを彷彿とさせる。肩から下がる帯状の布は、歩行するときに転ばぬように大人に引張ってもらう肩紐である。ただし、図4の場合は、子ども服のファッションとして定着した一種の装飾であり、実用性はない。折り跡がくつきりくつきりとついたレースの縁飾りつきエプロンも同様で、記念的色彩の強い肖像画であること考えれば、むしろ美しい装飾と見るべきだろう。⁷⁾

服飾からは離れるが、ラーフェステインの肖像画には興味深い細部がほかにもある。まずは傍らの椅子の上の大鼓と撥と木馬。遊びは、子どもの無辜むこのしるしであり、体をつくり、社会性を学ぶ機会として、繰り返し推

奨されていた。子どもが手にするゴルフのステイックとボールも、子どもの遊びの一つであった。⁸⁾ただし、ここに描かれたゴルフの道具は、幼児の右手がボールに差し向けられているところから見て、単なる遊びの示唆に終わるものではなく、おそらくは、幼児が将来身につけるべき「恒心」を示唆していると思われる。⁹⁾傍らの椅子の腕木に止まるオウムは、人の言葉を真似るところから、子どもの学びの重要性を強調し、幼児の足もとに行儀よく座るイヌは、彼の遊び友だちであるとともに、彼の良きしつけの証しとして描きこまれている。¹⁰⁾

男児が、いつごろ、スカートからズボンにはきかえるか、正確なところはわからないが、推測のための資料がないわけではない。十七世紀オランダきつての知識人クリステイアーン・ハイヘンスは、一六三七年の日記に、妻の喪があけたのを機に、二人の息子にズボンをはかせることにしたと書いている。¹¹⁾ときに息子は八歳と六歳。この年頃が一つの目処ということなのだろう。一六五三年の記録だが、新調の男児子ども服は、胴着・ズボンそ

ろいで四十七ギルダーだった。¹²⁾当時の単純労働者の年収の四分の一ほどだから、安い買い物ではない。できあがった服は、おそらくは、ファン・フリート(1611頃—1675)が描いているような、胸前にボタンが並び、やや胸上に切り替えの入った上着、膝あたりで絞ったズボン、それにレースの襟と袖口、長靴下といったとりあわせだったろう(図5)。

同じファン・フリートの作品から、女兒の場合も観察しておこう。面白いことに、最も若い女兒の白地に黒のパターンをあしらった服、エプロン、肩紐は、ラーフェステインの描く男児のものと共通する。しかし、頭巾や首飾りを身につけ、そして何よりも母親の傍らにいるので、こちらは間違いなく女兒である。成長した後の服装は、右端に立つ二人の少女のように、胸前にボタン、やや胸上に切り替えの入った胴着、長いスカート、レースの襟と袖口といったパターンもあれば、切り替えがウエストのあたりに下がり、スカートを二枚はき、上のスカートを膝前くらいで折り上げて、下のスカートを見せ



4 (上左) ラーフェステイン 《ある男児の肖像》、1628、個人蔵

5 (上右) ファン・フリート 《ミヒール・ファン・デル・デュッセン一家の肖像》、1640、デルフト、市立プリンセンホフ美術館

6 (中左) ヤン・ステーン 《デルフト市長とその娘の肖像》(部分)、1655、個人蔵

7 (中中央) フェルスブロンク 《ある婦人の肖像》、1640、エンスヘーデ、トウエンテ国立美術館

8 (中右) フェルスブロンク 《ある少女の肖像》、1641、アムステルダム、国立美術館

9 (下左) デ・ウィット 《デルフトの新教会のウィレム沈黙公の墓》(部分)、1656、リール美術館

る場合もある(図6)。ちなみに、十七世紀半ばが過ぎると、短いちょうちん袖の下から、レースの袖が見えるスタイルが流行してくる。¹³⁾

一般に、子どもの服には、大人の服の流行がそのままに反映する。というより、子どもの特性を考慮した子ども服など存在しなかった、大人服のミニチュア版が子ども服だった、と言ったほうが正確だろう。ただし、先にも触れたエプロンと肩紐は、子ども服特有のもので、実用と装飾を兼ねていた。また、子どもの服が大人の服に比べ、カラフルだったことも大きな違いである。十七世紀オランダでは、華美な服装に対するタブーの念が根強く働いていた。教会当局(プロテスタント)も知識人たちも、幾度にもわたり、華美な服装を戒める声を上げて¹⁴⁾いる。未曾有の繁栄を謳歌していた時期にあつて、成功者たちが手に入れた富を装いに惜しみなく注ぎ、それがときに目に余るほどの贅沢となつたのである。そうした状況下で、大人、とくに女性たちは、黒の服を身に付け、謹厳さを装った。とはいえ、その生地は見るからに

高価で、袖口と襟元には凝つたレースをまとい、胸前には金糸をあしらひ、シックな帯やリボンや手袋や扇子を何げ気なくしのばせ、真珠や宝飾品で頸・耳・首・胸前・指・腕を控えめに飾るなど、贅沢なおしゃれは隠れもない。一方子どもたちは、親たちの欲望をストレートに反映し、惜しみなく華やかな装いに身を包んだ。

フェルスプロンク(1606/09—1622)の描く夫婦の肖像と、彼らの娘の肖像は、そこら辺の事情をきわめてよく体現している。一六四〇年、画家はいまでは身元不詳になつた夫婦の肖像画を制作した。ここでは、比較のために妻の方に注目するが(図7)、彼女は、白いブラウスの上に富裕層の女性のならいで深々とした黒の服をまとい、肩襟の上に四角い布を対角線上に折り重ねたレース襟をかけ、胸前には宝石をあしらつたりリボンをつけ、やや胸上にレースのバンドを結び、襟と同じ素材のレースで袖口を飾り、そして真珠のアクセサリー(涙型のネックレス、髪飾り、三連のネックレス、五連のプレスレット)と指輪をつけ、右手に羽の扇を持ってポーズし

ている。ずいぶんと贅沢に着飾っているのだが、何せ基調が黒なので、像主の女性からはシックで落ち着いた雰囲が漂う。一方、一年後に描かれた彼女の娘の方はどうだろう（図8）。いささかの異同はあるものの、ほぼ同じようなポーズと装いで画家の前に立っている。ただし、服の色が薄い水色に変わり、金糸の刺繍がふんだん用いられ、おまけに背景も明るく処理されているため、華やかさが一段と際立つ。上記のように少年の服が五十七ギルダ弱だったとすれば、六歳から八歳くらいと推定されるこの少女の装いには倍以上の大枚が払われたのではないか。

子ども服に費やされる額の大きさは、十七世紀当時からモラリストたちの批判を引き起こしていた。聖職者のウイレム・テーリング（1579—1629）は、多くの親たちが子どもに美しい服を着せることにこだわる、「あなた方は、子どもたちを、あなた方の子ども時代にそうであつたよりも三倍も高価に着飾らせている。それを好む子どもたちは、大人になると、自分の子どもにさらに贅

沢な服を着せるだろう。そして虚飾とむなしさが海のようになだれ込んでくる」、「子どもたちは、最上の服を着込んでいると、近寄りがたくなり、悲しむべきことに、近隣の普通の服装の子どもたちに対して横柄になり、怒りっぽくなり、さもなければ、遊ぼうとしていた彼らをほとんど尊重しようとしなくなる」と、贅沢な装いが見境なくエスカレートし、子どもたちの心を蝕みかねない危険を指摘した。¹⁵⁾十七世紀にオランダを訪ねた旅行者の多くは、子どもが甘やかされていることに驚きの声を上げていた。¹⁶⁾絵画に見られる子ども服の選択は、そうした声が単なる誇張でないことを教えてくれる。子ども服には大人の生活意識が如実に映し出されているのである。

最後に、親が子どもの服にかまっていられないケース、つまり経済的に余裕のない家庭の子どもにも目を向けておこう。基本的に、男児は白のシャツに胴着とズボンと帽子、女児は白のブラウスに胴着とスカートと頭巾、そして実用のエプロンというのが定番である（図9）。素材の質が格段に落ち、しかもくたびれ果ててい

る、レースなどの贅沢な装飾もなければ必要のない重ね着もしないといった点を除けば、あくまで筆者が目を通した絵画に基づいての判断だが、富裕層と貧困層の子どもの装いの形にさほど大きな差は見られない。形ではなく、贅沢さの度合いで、富裕層は貧困層と自らを差別化していたということだろう。このことは、十七世紀オランダ社会が、他国に先駆けて、出自ではなく、金銭を最重要尺度とする資本主義社会を形成していたことと無縁ではなからう。もちろん、貧しい子どもの服は、どこかが破け、裾がぼろぼろになっていることが多い。子ども服は、子どもの成長にあわせて作り直し、擦り切れるまで繰り返し利用されるのが常だったからだ。十七世紀には古着市場が活発に機能していた。¹⁸⁾だから、着古されたものは、持てる層から持たざる層へと、富の階段を下るように使いまわされたのである。

子どもは、物心ついたときには、すでに親の選択したものに囲まれて暮らしている。事のよしあしから始まっ

て、言葉、行動範囲、交友関係、教育、食べ物、髪型、服装など、すべてが、子ども自らが何らかの判断を下し、意思を表明する前に親から与えられ、子どもの世界観の形成に重要な影を落とす。子どもの中には、自らの才能と行動力と判断力でやがて独自の道を切り開き、親とは全く異なる世界に入り込んでいく者もあるが、階級構造が安定している社会では、親の築いた世界の外に出るのとはなかなかにむずかしい。中でも親の意思が、気づかぬうちに子どもの理性・感性の両面にわたって浸みわたってしまったのが服装であろう。第二の皮膚といわれる服は、防寒や保護という実際的な役割を超えて、形や色や素材を通じて、他者とのかわりを意識化させ、社会的自我の目覚めを促し、着る者の感性を育てる重要なきっかけになるからだ。大人服なら抑制されたものが、子ども服だからこそ顔を出すこともある。子ども服は、十七世紀オランダ社会を構成する大人たちを映し出す優れた鏡の役割を果しているのである。

(目白大学)

註

- 1) 以下は、一六三〇年頃―一六〇年頃の子どもの服装を絵画のなかに探る試みであるが紙数の関係もあり、時、場、役割りによって大きく変化する装いの逐一は必ずしも厳密に追跡していない。
- 2) レンブラントは、特に一六三〇年代と四〇年代に素描、エッチングで乳児、幼児をモチーフとした作品を制作している。詳細については展覧会図録 *Rembrandt's Women*, National Gallery of Scotland, Edinburgh, 2001 et al., pp. 129-141, 190-192 を参照されたい。
- 3) レンブラントに関する古文獻については W. L. Strauss et al., *The Rembrandt Documents*, New York, 1979 を参照されたい。
- 4) 子どもをモチーフとしたレンブラントの素描、エッチングが、実景か、構想か、自身の子どもの姿なのかについては種々の議論がある。詳細は註2に挙げた文献を参照されたい。
- 5) S. Kuus, 'Kinderen op hun moost. Kinderkleding in de zeventiende eeuw', in *Kinderen op hun moost* (exh. cat), p. 76 による。なお、以下の子ども服に関する情報は多くは、同論文を参考にしている。
- 6) 小林頼子『フェルメールの世界』、NHK出版、一九九九、157―158頁を参照されたい。
- 7) 詳細は註4に挙げた Kuus 論文の 76、81頁を参照されたい。
- 8) コルフは、現在のゴルフの原型に当たる遊戯である。十七世

- 紀には、子どもも大人も楽しんでいた。コルフの発祥、ゴルフへの展開については、展覧会図録 *Pieter de Hooch 1629-1684*, Dulwich Picture Gallery, 1998 et al., p. 136 を参照されたい。
- 9) コルフが美德の一つ「恒心」と結びつく根拠についてはエディ・デ・ヨンク『オランダ絵画のイコノロジー』、NHK出版、二〇〇五（小林頼子ほか訳）、229―230頁を参照されたい。
 - 10) 犬と子どものしつけの関係については、註5に挙げた展覧会図録に J. B. Bedaux が寄せた序章の 19―22頁を参照されたい。
 - 11) 註5に挙げた Kuus 論文の 81頁を参照されたい。
 - 12) *Idem*.
 - 13) ちようちん袖の例はヤン・アルベルツォン・トティウスが 1663年に制作した《四歳の少女の肖像》（オンタリオ美術館、トロント）などに見られる。
 - 14) 小林頼子『フェルメールの世界』（註6参照）、156頁を参照されたい。
 - 15) 註5に挙げた Kuus 論文の 73頁を参照されたい。
 - 16) S. Schama, *The Embarrassment of Riches. An Interpretation of Dutch Culture in the Golden Age*, London, 1987, p. 485
 - 17) 註5に挙げた Kuus 論文の 75頁を参照されたい。
 - 18) 展覧会図録 *Street Scenes: Leonard Bramer's Drawings of 17th-century Dutch Daily Life*, Holstra Museum, New York, p. 69 を参照されたい。

女性の心と体に忍び寄る危険(2)

— 思春期から成年へ —

〈お茶の水女子大学公開講座「子育てのためのリスク管理論」から〉

大森 美香

うつについて

うつが非常に理解されにくい、あるいは環境調整が難しいという理由に、見た感じではわかりにくいとすることがあります。乳がんなどで手術した・入院したということであれば、周りにも「あ、病気なんだ」と思ってもらえますが、うつというの

は、外見で「あ、あの人、うつ」という感じではないですね。ですから「甘えてるんじゃないか」と周りから捉えられてしまうことも非常によくあって、環境調整しようとしてもなかなか難しい状況があります。かつ、もともと真面目で、能力があつて、なんでもこなせる方というのが、うつになりやすいようなところがあります。「私はここまでできる」と

いうことをある程度わかっていることがあり、「それができない自分」に対して非常に悲観的になってしまうのです。

また、いわゆる一般的なうつ病と、産後うつは区別しなければなりません。症状として現れるものには、同じような部分があります。また、産後うつは経験していなくても、育児のストレスとか子育ての過程の中で非常に強いストレスを感じるようなことが慢性的に続いてくると、うつ病になってしまうということもありますので、身近な問題として捉えていただきたいと考えています。うつ病の罹患率については、男性に比べて女性の方が全般的に高いのです。この統計は「気分障害」（うつ病を含めた感情の起伏に関する障害の総称）の患者数なので、専門的にはうっただけではなく、いわゆる双極性の気分障害も入っていますが、全般的に、思春期・青年期から老年期にかけて女性のほうが高くなっています。

す。このことから、うつ病に関しての理解は深めておく必要があるかと思えます。

抑うつ気分と抑うつ症状

「うつ病」の判断基準ですが、「抑うつ気分」「抑うつ症状」とは実は微妙に違います。いわゆる落ち込んだ気分というのが「抑うつ気分」で、これに関連した症状を「抑うつ症状」といっています。興味を失う、疲れやすい、自殺を考える、集中力の低下、食欲や体重の増減（食欲がなくなったりごく体重が減る場合と、逆に過食傾向になって増える場合がある）、悲観的な考え、睡眠の問題（寝つきが悪くなる、寝付いてもすぐに起きてしまう、早朝覚醒が頻繁にある、あるいは逆にそれまでと非常に違うサイクルになってより過眠の傾向が強まるなど）などがあげられます。うつ病はよく「心の風邪」といわれますが、悲観的な考えが基になって些細なことから

でも自殺を考えるようになるようですので、軽視できないのです。勿論「うつ病」ではないけれども、「抑うつ症状」が現れている場合は治療の必要があります。「うつ病」と診断されるものでないからといって、心配する必要がないということではありません。こうした症状がかなり持続しているような状況では、なるべく早めに、適切な機関を訪れて相談することが大切です。

ストレスとストレッサー

もう少し建設的に「うつ病は誰にでも起こりうる確率はあるかもしれないが、どのようなことをしたらこういうことを回避できるのか」という視点から、ストレスマネジメントの方法を一つ紹介させていただきます。と思います。

ストレッサーとは「ストレスを引き起こす要因」で、ストレスと普段私たちがいっているのは、負荷

がかかったことに対してわれわれが心身の健康状態を保とうとするために起こる反応で、ストレッサーとストレスの関係は、作用・反作用の関係ともいえます。ストレスは、通常イライラ、抑うつ、不安、身体症状として現れます。

また、ストレッサーは一時的なものとは限りません。日々の細々としたストレスが慢性的なものとなると、胃潰瘍になってしまうということもあります。こうしたストレスとストレス反応が起こるそれぞれの段階に応じた対応が考えられます。たとえば、ストレッサーが非常に強いのであれば、何らかの「環境調整」を行って、ストレッサーそのものを低減することもできるでしょう。

また、ある出来事に対する「認知的評価」（捉え方）によって心理的な負担が異なることが指摘されています。このような認知的評価のスタイルを修正していくことも必要になってくるかもしれません。

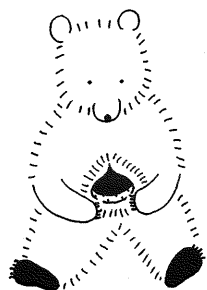
その認知的評価も、第三者から見れば常識的な捉え方をしているのであれば、次は、どのようなアクションを起こさなければいけないでしょうか。これに關しては、「社会的スキル訓練」、たとえばいい形での自己主張がちゃんとできるようになるなどの対人スキルを訓練していく必要があります。さらには、ストレス反応が起こるという場合に備えて、リラクゼーションの方法なども身につけておいたほうがいいでしょう。

ストレスマネジメント

私たちのストレスサワーの多くは、日常での苛立ちごとであると考えられています。特に女性の多くは、多重役割、つまり、仕事、家事をするなど一家の主婦としての役割、育児・子育てなど母親としての役割、PTA活動、介護など、複数の役割を担っていることですが、このように多くの負担を女性が抱え

ています。このような多重役割がストレスサワーになるということが、成人女性の特徴であるといえます。こうした日々の苛立ちごとが慢性的に持続した状態が、実は、とても有害だとされています。

そこで、ストレスマネジメントの方法のひとつとして、自律訓練法を紹介いたします。十九世紀の末頃、催眠の研究が多くなされており、その研究者が催眠をかけた人に共通してなんとなく体の調子がよくなるということを発見しました。そこで、これら催眠で得られる状態を自分でつくり出すことができた、からだの調子がよくなるだろうという発想のもと、体系出されたのが自律訓練法です。ドイツのシュルツ教授が考案したものを、九州大学心療内科の先生が日本に輸入しました。その自律訓練法は現在、心療



内科や心身医学での治療の場面で、産業界、教育界などでも、全般的なストレスマネジメントの方法として非常によく使われています。また、宇宙飛行を経験された毛利衛さんも、NASAでトレーニングを受ける際に、バイオフィードバックとあわせてトレーニングの一環として使った方法でもあります。

次に、自律訓練法の中でも標準練習を紹介します。基本的にこれは六つの公式で成り立っていません。ただ、一つひとつ段階を踏んでいかなければならないので、まず、本当に最初の第一公式のところだけを説明します。この練習では、要はリラックスした体の状態を意識的に再現するということをします。また、継続的に練習していくことよって効果があげられるような練習ですので、残念ながら即効性のあるものではありません。続けていって初めて効果が出るという方法なのです。

標準練習としては六つの公式があります。

- 背景公式「気持ち落ち着いている」
 - 第1公式「両腕・両脚（あし）が重たい」
 - 第2公式「両腕・両脚（あし）が温かい」
 - 第3公式「心臓が規則正しく打っている」
 - 第4公式「とても楽に呼吸（いき）をしている」
 - 第5公式「お腹（なか）が温かい」
 - 第6公式「額が心地よく涼しい」
- 簡単なようですが、実際にやってみると実は難しいところがあります。気持ちが落ち着いてリラックスしている状態になると、私たちの筋肉はゆるんだ感じになり、それが主観的にはなんとなくだらんとした感じになる、それを重たいというふうに表示しています。そうすると、血行がよくなつてきて、なんとなく暖かいという感じとして伝わってくる……といったような、リラックスしていると起こってくる体の変化を一つひとつ確認していく、そうした練習を積み重ねていくことによって、リラッ

クスしているときと、そうではないときの切り替えをうまくする、ということを練習していきます。

緊張した状態が非常に強く持続してくると交感神経系が優位に働いて、たとえば、ドキドキと心拍数が増える、血圧が増える、筋肉がこわばるなどの状態が慢性的に続いてしまいます。それが身体的に持続的に起こってくることによって、自分の体質的にもともと悪いところ、消化器系が悪い人は、十二指腸潰瘍や胃潰瘍になったり、皮膚科系がちょっと弱い場合は、脱毛症になったりする。従って、この練習では、リラックスした状態を再現することによって、緊張したときは緊張したとき、リラックスすべきときはリラックスするなど、切り替えをうまくできるようにする訓練だと説明をしています。

練習をするにあたっては、まずリラックスしやすい状態を整えます。物理的な環境としては、暑すぎず寒すぎず、明るすぎず暗すぎないような、リラッ

クスしやすい環境を整えてください。きつい下着など体を締め付けるようなものはなるべくはずして練習に取り組んでください。

それでは、さわりの部分だけ練習してみましよう。軽く目を閉じてから練習をしますが、「消去動作してください」と言ったら、両手で握りこぶしを作って、閉じて開いてを繰り返した後、ひじの屈伸をしてください。そして、最後にグーっと伸びをして、軽く閉じていた目を最後に開けるようにします。これが、最後に自分の体に練習が終わったことを伝えるための消去動作というものです。

では、軽く目を閉じてください。そして両手はひざの上に置いて、背中も背もたれからこぶし一個分くらい離してください。直立不動の姿勢をとる必要はないので、ふつうにだらんとしてください。足の幅は大体肩幅くらいに広げて、途中、咳とかくしゃみとか、かゆいところがあつたら我慢する必要はあ

りません。姿勢もぎこちなくなってきたら適当に変えてください。

それでは、頭の中で「気持ちが悪く落ち着いている」と唱えましょう。「気持ちが落ち着いている」。これは無理に落ち着かなければいけないということではなく、環境を整えて、人前で話すときや重要な会議に出なくてはならないときに比べたら少しはリラックスしていることを確認できれば結構です。自分が一番リラックスしやすい状況、たとえば、家で音楽を聴いている、高原でくつろいでいる様子など、想像していただけるとよいかもれません。

両手がひざの上に置かれています、すこし注意を利き手のほうに向けてみてください。大方の人は右手かと思いますが、右手が右足の上に置かれています、衣服を通して足に触れている感じ、それを確認するくらいです。そして、頭の中で「右手が重たい」。重たい荷物を持った感じというよりは、右手

が自然とだらんとした感じを想像してみましよう。人によっては、そこから右手を離したくない感じとして捉えられる場合もあります。「右手が重たい」。

そしてその注意を少しずつ左手のほうにずらしていきます。左手も右手と同じように、衣服を通して左足に触れている感じ、指先がだらんとしている感じ、それをまず確認してください。そこに置かれている感じを確認できれば結構です。そして「左手が重たい」「左手が重たい」。重たいというのは重たくなれとか、重たくないといけないということではありません。そして、両手いっぺんに注意を向けてみます。両手が両ひざの上に置かれていて、衣服を通して足に触れている感じ。そして頭の中で「両手が重たい」と感じてみましょう。

それでは、自分のペースで、先ほどの消去動作を行って、練習をいったん終わりたいと思います。まず握りこぶしを作っていただいて、机に注意しなが

らひじの屈伸をして、最後にちよつと伸びをして、目を開けてください。

以上、第一公式の最初のところだけをやってみました。このように、自律訓練法の練習を重ねていくことによる効果として、日々の生活の中では、「蓄積された疲労の回復が得られる」「イライラせずにおだやかになる」「自己統制力が増し、衝動行動が少なくなる」「仕事や勉強の能率があがるようになる」「身体的な痛みや精神的な苦痛が緩和される」「内省力がつき、自己向上性が増す」などがあげられます。しかしながら、積み重ねていかないと、こうした良い効果が出てこないということもありますので、関心のある方はストレスマネジメントの方法の一つとして、このようなものを勉強されてみるとよろしいのではないかと思います。

特に女性の方で、「特に私悪いところはどこもないし」という方でも、女性に特有の効果として、お

通じがよくなる、肩こりしにくくなる、寝つきがよくなる、そうした日常の効用も期待されています。ただし、身体の状態によっては行うべきでない場合もありますので、本格的に練習を行いたいと考えている方は、専門家の指導を受ける必要があります。

自律訓練法に関してはたくさん本もあります。実際に自律訓練学会という学会もあり、産業界、医学界、教育界の研究者たちがいろいろな研究をしています。書店でよく見かけてクラシックな本が、佐々木雄二先生の『自律訓練法の実際』という本だと思えます（創元社）。参考文献として掲げておきます。関心のある方はお読みください。

〈へ〉

（お茶の水女子大学）

（講演 平成十八年二月九日）

保育の変革を目指して(4)

― 折々に考えたこと ―

入江 礼子

共に支え、つながり、育ちあう

はじめに

この五年間は静かに閉じた「静」の園から保護者をも保育に巻き込む「動」の園への移行プロセスであり、保
育者もまたさまざまなことに対峙・葛藤しながら歩み
を進めてきた。これは私と現園長のNさんがP女子大
学幼稚部(以下幼稚部)に園長・副園長として赴任する
とき、「園を改革する」ということを大きく意識して

いたこととかかわりがあるのかもしれない。ともかく
「子どもたちが元気に遊ぶ園」にしたい。そのため
は子どもを中心に据えて保育者と保護者が「共に支
え、つながり、育ちあう」ことが必要で、そのキーワー
ドは「開く」ということではないか。変革のプロセス
で私たちはこんなことを意識するようになった。
このスローガンともいえる「共に支え、つながり、
育ちあう」という言葉も、「開く」という言葉も、ど

のようにして紡ぎだされたのかは実はよくわからない。幼稚部という場に身を置き、生活を始めたとき、この場に必要なのが直感的に言葉になったという感じである。こんなふうに直感的なひらめきとして出てきた言葉ではあったが、この五年間行き詰まったときもこの方向で考えていくと、これを打破するための方策が見えてきた。これらの方策は五年の間にさまざまに紆余曲折を経ながら現在も幼稚部に位置づいている。初めは小さな源流であったものが五年の歳月を経るうちに、今では複雑につながりあい、園としての大きな力動性を醸し出している。今回はその力動性の源流が仕掛けられた経緯を見ていくことにしたい。

園内研修

「保育についての話し合いは保育実践の現場であれば欠くことのできないものだ」ということは学生時代に愛育養護学校幼稚部の前身である「家庭指導グルー

プ」で実習して以来の私の持論でもある。しかしその後、このような保育の話し合いは案外行われていないという現実もあることを知った。幼稚部に赴任してみると、ここでもその例に漏れず、行事の相談などの話し合いは不定期にあるものの、恒常的な保育の話し合いは行われていないことがわかった。「子どもたちが遊んでいないように」見える状況を変えていくためには、話し合いの機会をもたなくてはならない。それかなり頻繁にしなければならぬと考えた。

そこで週一回「園内研修」と名づけて、保育の話し合いを行うこととした。「園内研修」というと幼稚園や保育所などで園のテーマをもつて取り組む場合の話し合いを指すことが多い。これは日常的に行うというより、その課題解決に向けて日常の話し合いを踏まえて、その一段上に位置づける場合がほとんどであろう。しかし私は普通であれば「職員会議」と銘打つ話し合いをあえて「園内研修」と呼びならわすことにした。

打ち合わせから、保育の話し合いまで全てが研修となりうると考えたからでもある。こういう日常からいずれは研究課題も立ち上げたいとも夢見たのである。

この五年間では園務、行事の話し合い、保育の計画、保育内容に関する話し合い、子どもの成長発達に関する話し合い、保護者に関する話題、園児募集に関する事など、幼稚園という場が背負わなければならないありとあらゆる話題が話されていった。一年という周期の中で、また五年という流れの中での主話題は折々変化した。しかしこの五年間貫き通したこともある。それは担任もフリー保育者も園長・副園長も、時には事務方も参加する全員参加の原則である。

指導計画の作成

こうして園内研修が始まったが、各学年の保育がどのような計画をもって進んでいくのかを話し合うときには資料があった方よい。園内研修は週一回行われ

る。日案レベルで毎日書くよりも週間指導計画と日案を合体させた週日案が合理的であり、一週間を見通せることもあって週日案のフォームを作成した。それ以後三回に渡って改訂を繰り返す（その状況については『幼児の教育第一〇二巻第十一号』に詳しい）ことになるのだが、この週日案があることで園内研修に骨を一本通すことになった。それはクラスの担任が、一週間を子どもとどのように生活していこうと思っっているのか、ということと、その根拠を園全体で共通理解できることである。

この週日案はそのフォームを見直すことの中から、保育者がどのように他の保育者と連携をとっていこうとしているのか、ということや、自分の保育者としての課題や積極的に取り組んでいることがわかりやすいものへと改定されていった。また、若い保育者が多い現場であることもあって、一生懸命取り組むのだが、帰宅が遅くなり、疲れすぎて病気になる保育者もで

た。そこで保育後の仕事にどう取り組んでいくかというところが大きな課題となった。その結果、保育後の仕事を予め週日案に全員に共通理解できるように入れ込んでおくという工夫をするようになっていった。

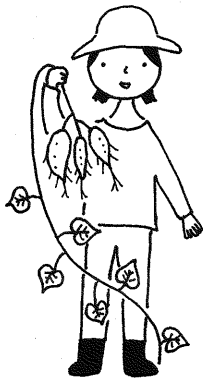
保護者と園長・副園長との懇談会

園長・副園長が代わるということはそれだけで保護者の心配を誘ってしまう。園の方針を一新したこともあり、ともかく小まめに保護者と会うチャンスをつくらなくてはと考えた。クラス懇談会は今まで通り、原則として学期に一度行うというのを踏襲した。それに加えて立ち上げたのが各学年月に一度ずつの園長・副園長との懇談会である。特に一年目は担任たちにも私たちの保育方針が了解しきれていないこともあり園長・副園長でその部分を担わざるを得ないという事情もあった。主な内容は月の行事の流れや保育の内容などに対して、保護者が見通しをもてるようにするこ

と、また、子どもたちの成長や遊びの様子を伝えることであった。保護者の方からも子どもに関して心配なことや園の方針に対する質問、行事や保育に関することなどで思っていることなどを率直に述べてもらう場となっていた。私が赴任する前は対話形式の園長との定期的な懇談会は設定されていなかったためか、保護者もこの場をどう使っていたらよいか戸惑っている面もあった。

しかし、この場が定着してくるにつれ、今度は幼稚園に対する要求が度を越えているのではと思うほど増えていった。「まずは聞きます」というこちらのスタンスが浸透していった結果ともいえるが、不安の裏返しでもあるこ

れらの要求の中には、ときに私たちの保育の弱点を言



い当てているものもあった。また保護者から、いわゆる不満が出てくるのは、子どもの育ちが停滞しているときであることも多いというのが、この懇談会を通して気づかされた。子どもの育ちに不安をもつ保護者の声は辛らつであつても聞く耳をもつ価値があり、自分たちの保育の質を上げていく手がかりになるといふことを、痛みを伴いながら学んでいったのである。

保護者の保育参加

幼稚園の旧園舎には各保育室にマジックミラー室が設置されていた。保護者は年に何回かこのマジックミラー室に入つて、保育室にいる我が子を本人に知られずに観察し、終わるとそのまま我が子を見つからないようにそつと帰宅したという。そのような観察型ではなく、参加型の保育参加ウィークを年二回実施することにして、現在までに十一回を数えている（保育参加ウィークの一部の状況については『幼児の教育 第

一〇〇巻第一〇号』及び『第一〇一巻第四号』に詳しい）。保育参加後は必ず園長・副園長と一緒に懇談のときをもつというのがその条件である。このときには学年を越えて保護者が集まるので、普段はあまり聞くことのない違う年齢の子どもの保護者の話を聞くチャンスにもなる。年少の保護者は年長の保護者の話を聞いて、我が子の成長のプロセスに少しではあつても見通しをもてるようになったり、その反対のケースでは我が子が確実に大きく成長していることを実感できたりもする。

私たち保育者は、初めの頃は私たちの保育の質が未熟だったこともあり大いに批判された。しかし、保育者が保護者から批判を受けたり、違う視点からの指摘を受けることで、自分たちの保育を説明できるように努力し始めた。また、保護者にも保育参加のときに楽しめるような工夫をすることなどが見られるようになってきた。園長・副園長との懇談会ではないが、批

判を浴びることが若い保育者を伸ばすきっかけになることを再確認できるようになってきた。

保護者会と保護者会活動の立ち上げ

保護者と園との恒常的な出合いの場が少なかった幼稚園部であったが、副園長がリーダーシップを執って、保護者会を立ち上げることにした。もちろんこれにもブリーングはあった。そのような活動がないからこの園を選んだのに、それらの活動が入ることは約束違反であるというものである。しかしそれにはめげずに、しばらくは交通整理として園側が主導を取るという条件で保護者会を立ち上げた。役員も選び、月一度役員会を開くこととした。役員会での決定事項は必ず園長・副園長との学年別懇談会でも流した。

保護者会の活動といっても、すべてボランティアベースである。絵本クラブ、おもちゃ工房「ピノキオ」を立ち上げ、六年目に入ってから園芸クラブも

立ち上がっている。このボランティアベースの活動は、子どもの園生活を豊かで楽しいものにするために一役買ってくれている。また保護者のもつ力はすばらしく、時間がある分、準備もできるので、絵本クラブではかなり高度な芸術性の高い絵本の読み聞かせや、絵本に題材をとったブラックライトシアターでの公演など子どもたちに還元する活動が活発化している。また子どもたちの遊びに必要な遊具を制作するなど、おもちゃ工房ピノキオの活動も同じく活発化してきている。保護者のこれらの活躍は若い保育者には自分の保育技術を見直すよいチャンスとなっており、園全体の保育内容の質を高める上で大きな刺激となっている。

「あゆみ」の見直し

「あゆみ」とは、学期ごとに出している写真と成長の記録である。これも以前は小学校の通知表状のものであった。幼児期に一方的な通知表はいらないと考え、

その代わりに学期ごとの育ちがわかるような形式のものに変えたいと考え、実行に移した。

「あゆみ」を書き、子どもたちの写真を撮ることは担任の負担

を増やすことではある。しかし、保護者に子どもの様子を伝えるためには日々の保育にしっかりと取り組みなくてはならない。この五年間で、何回か形式や内容について改良を図ってきたが、最近ではこの「あゆみ」に保護者欄を設け、保護者からのコメントも入れている。子どもたちが大きくなって、社会の荒波にもまれるようになったとき、幼い日々親と共に当時の担任が自分のことをしっかりと見守り、支えてくれていたことを感じて心が温まるようなものにと願って継続している。



学年ごとのオープンクラス

幼稚部に赴任して二年半が経ったとき、元の大学の

建物の内装を幼稚園仕様にした新園舎への引越しがあった。このとき学年ごとにクラスの壁を取り払い、オープンクラスにした。学年ごとに担任が二人ずつ組むという形式である。クラスはオープンになっているので学年の保育は協力して進めていかななくてはならない。多少乱暴であったかもしれないが、相談して保育をつくっていく道を選ぶことになった。しかし、やってみて気づいたことは二人がしっかりと地に足をつけて、自立していなければ、本当の意味のチームティーチングはできないということである。そしてよく話すことがなされなければ、これまた成り立たない形態である。

未就園児クラスの充実

幼稚部には以前から未就園児クラスがおかれていた。三年保育を採用する以前に週一回のクラスとして三歳児クラスをもっていたのである。三年保育を始め

た後も、主任ともう一人の保育者が組んで、幼稚園の内容をもう少し単純化し、やさしくしたものを行っていた。多くの場合二時間に満たない活動時間であるが、きちっとしたカリキュラムがあるわけではなかった。

五年前から少しずつ拡大の方針で動き始めた。未就園児担当の教員も配し、募集活動もしっかり行った結果、年毎にクラス希望者が増えていった。週一回クラスが三クラス分、約五十組の親子が通ってきている（ウエイテリングリストもある）。ここは親が子どもをただ預けるのではなく、一緒に過ごす中でお互いに学んでいくというスタンスである。

併設大学学生の希望者には実習生として一緒に活動を担ってもらうようになった。保育前の準備、保育、そして保育後のミーティングまでを一続きと考え、なるべくそのすべてに参加し、できれば一年間、継続的に参加するように伝えている。通ってくる子どもたち

にとってお姉さんの存在は大きいし、学生も子どもと親の両方に触れるという貴重な体験をしていることになる。三年目からは未就園児クラスの教員は週二日ないし一日は幼稚園の保育に入っている。特に三歳児クラスに入ったことで、三歳時クラスの担任も二歳児に興味をもつようになり、共同作業で保育に関することを取り組み始めている。

おわりに

先に掲げた八つの事柄は、どれも園を「開き」そこに集う「子ども」「保護者」「保育者」「実習生」が「共に支え、つながり、育ちあう」ための方策にほかならない。一つずつ見直しながら考えてきたことではあるが、いつの間にか方策という源流があるところでは合流しながら幼稚園という大地に大きな潤いをもたらすようになってきている。

（共立女子大学）

私を通った幼稚園・保育園 (14)

保育園という原風景に住む人々

新開 よしみ

姉は幼稚園、よっちゃんは保育園

今でも私のことを「よっちゃん」と呼ぶのは、原家族と親戚、それにごくわずかな古い友人だけだ。保育園に通っていた頃は、周りの誰からも「よっちゃん」と呼ばれていた。

よっちゃんは三人姉妹の次女。一九六〇年代に

東京都小金井市にある保育園に、ちゅーりっぷ組(年中)から、さくら組(年長)へ、卒園までの二年間通った。三つ年上の姉が幼稚園に通っていた頃、毎朝母親に長い髪を三つ編みに結ってもらい、おすまし顔でひらひらとちようちよのように出かけていくのをうらやましく見ていたよっちゃんは、姉と同じヨウチエンに行くことを楽しみし

ていた。ところが、妹が生まれ、母も内職をするようになり、よっちゃんは憧れのヨウチエンではなく、ホイクエンと呼ばれる場所に通うことになったのだ。

中間子というのは、親が手をかけられないのが常らしい。幼児期のよっちゃんは、三つ編みどころか、髪を長く伸ばしたこともなく、いつも男の子みたいなザンギリシヨートカット（しかも色黒）だった。

保育園の運動会の最後の場面。がんばったごほうびとして男の子にはさるのメダル、女の子にはうさぎのメダルが園長先生から一人ひとりに授与された。園長先生が私の首にためらうことなくかけてくださったのはさるメダルだった。もちろん、あとからうさぎメダルに替えてもらったが、幼心にかなりシヨックだった。そのくらい男の子みたいだったのだ。

登園はだいたい父親と一緒にだった。妹に母親を占領されていたためだろう。私は完全に父親っ子であった。父親の膝はいつもよっちゃんの居場所だった。父親にとっても男の子（の代わり）だったのだろう。父の休日に府中競馬場に行したこともあったし、小金井公園で一緒に凧揚げに興じたこともあった。父の大きな手にひかれて保育園まで歩く朝の風景をぼんやりと憶えている。そこではどんな会話が交わされていたのだろうか。父親による保育園送迎の姿は、当時はまだめずらしかったのだろうか。父の生前に当時の話をもっと聞いておくべきだったと悔やまれる。

もう一つ、親子遠足の思い出。その日の朝、同行できない母が他児の母親に「よろしくお願いします」と頼んでいるのをやや不安な気持ちで見上げていた記憶がある。広くて浅いひんやりと気持ちの良い小川で遊んだ。と、私の足先に何かギザ

ギザしたものがはさまった。私はとっさに「カニだ！ カニにはさまれた！」と思い大泣きした。すると、誰かのお母さんがすぐに駆けつけて「カニ〜〜！」と泣き叫ぶ私を抱き上げてくれた。足にはさまっていたのは錆びた空き缶だった。

よっちゃんはちよつと恥ずかしかった。でも、誰かのお母さんに抱っこされてなぐさめられて半べそかきながらもほんわりと嬉しかったのだ。

姉は幼稚園で私は保育園。女の子らしい女の子ではなく男の子に間違われるような女の子だったこと。母親よりも父親との関係が濃かったこと。

自分の親以外の大人にも救われたこと。これらはその後の私の生き方や個性に何らかの影響を及ぼしているだろうし、現在の私が、マルティプル・ペアレンティング（子育てにいろいろな人がかわる）やジェンダーなど保育に関連した諸問題を考えるときの原体験になっている。

よっちゃんとタカダ先生

家庭を離れての初めての園生活。園庭の様子や日々の保育の様子などはほとんど憶えていない。今でも思い出せるのは、いくつかの印象的な場面と、よっちゃんの周りにいた先生とおともだちのことである。

二年間担任だったタカダ先生は「笑顔」と「動き」が印象的な先生である。夏、水着ではなくパンツいっちょになって水遊びをした。小さな小さなプール（プールと呼べるようなものではなかったかもしれない）の外から、笑顔いっぱいのタカダ先生がホースで水をかけてくれた。気持ちよくて楽しかった。



冬はお弁当箱をストーブの周りに並べ、温めてから食べたものだ。ある日よっちゃんは、温められた赤いバラの絵柄のアルミ製お弁当箱を誤って床に落としてしまった。大ショック。タカダ先生はカラになってしまったよっちゃんのお弁当箱に、自分のお弁当の中身をていねいに半分に分けて入れてくれた。その時も笑顔だった。

よっちゃんはお昼寝がきらいだった。隣で寝ているおともだちにちよっかいを出してペランダに出されたことがある。ペランダで自分の裸足の足元ばかり見つめながら情けない気持ちで立っていたことを憶えている。が、タカダ先生の叱った言葉も怒った顔も全く思い出せない。私の記憶の中のタカダ先生はいつも笑顔なのだ。

タカダ先生は、リトミックを導入し実践された人物だったらしい。当時の保育園では先駆的な試みであったと思われる。「リトミック」というカ

タカナ言葉は卒園後も母親から何度も聞かされたのでよく憶えている。「おゆうぎ」ではなく「リトミック」。口数の多い方ではなかったよっちゃんもリトミックで身体を動かすのが大好きだった。タカダ先生に「よっちゃんじょうずだね」とみんなの前で褒められた記憶もある。言葉に身体をのせて動く楽しさ。二十代の私がプロダンサーを目指すこととなった原点かもしれない。

現在保育者養成校に勤務しているが、実習巡回で保育現場を訪れるときに、学生が「笑顔」で子どもとかかわっている姿を見るとそれだけでほっとする。よくやっていると嬉しくなる。理屈抜きで保育者の「笑顔」は大事だと思ってしまうのもタカダ先生の影響かもしれない。

よっちゃんとおともだち

保育園という原風景には、先生だけでなく何人

かのおともだちが住んでいる。なかよしのユカリちゃん、おっとりしたマコちゃん、ピアノが上手なツドイちゃん、おふざけ得意なマサアキくん。タカダ先生が名づけたのだろうか。子どもたちが自然にそう呼ぶようになったのだろうか。「おせっかいクミちゃん」「おしゃべりジュンくん」「うそつきマキちゃん」というネーミングで記憶の中に住み続けているおともだちもいる。

「うそつきマキちゃん」は、顔はまったく思い出せないが会話場面が印象的なおともだちである。夕方お迎えを待つ時間帯になると「パパはね。アメリカに行つててね。私も昨日飛行機に乗つてアメリカに行つたの。パパはすごい。宇宙にも行つたのよ」というような、どこまで本当かウソかわからないような話をしてくれるおともだちだった。だからみんなから「うそつき」と呼ばれていたのだが、よっちゃんはマキちゃんの話を知

くのが好きだった。マキちゃんのウソにはわくわくした。子どもはいつ頃からウソをつくのか。人を騙して陥れるウソではなく、人を楽しませるような創造的なウソの効用。マキちゃんは、大学生になったよっちゃんに「フィクション考〜日常から劇的宇宙へ〜」という卒論テーマを与えてくれたおともだちである。

「おしゃべりジュンくん」とは、実は昨秋、何と約四十年ぶりに偶然ネット上で再会した。親が転勤族だったため、小学二年で小金井市を離れたあとも転校を重ね「幼なじみ」とは無縁であつた私にとつて、ジュンくんとの再会は本当に感動的で嬉しい事件だった。ジュンくんはひらがなの「さめじまよしみ」という私の旧姓を憶えていてくれた。私もひらがなのジュンくんのフルネームを憶えていた。保育園時代と転校するまでの学童保育時代、たった数年間とはいえ、日々の「生活」と

「遊び」の濃密な時間を共有したからこそだと思う。再会した私たちはしばし思い出話に花を咲かせた。ジュンくんの原風景にも共通のおともだちが住んでいた。

「おしゃべりジュンくん」は現在俳優さんである。ジュンくんは、そのルーツが保育園時代に「みにくいアヒルの子」のナーレーター役、「ブレーメンの音楽隊」で盗賊の親分役をやったことにあるのではないか、とふりかえって語ってくれた。よっちゃんも劇が好きだった。魔法使い役が決まったとき、父親が雨傘の持ち手部分をノコギリで切り取り、その先に新聞紙を筒状につけ、それこそ魔法のような手さばきで「魔法の杖」をこしらえてくれた。それを持って大得意で魔法使い役を演じたことを憶えている。

さらにジュンくん情報によれば、当時保育園児にして天才ピアニスト！と親たちに絶賛され注

目的であった（おぼっちゃま風だと記憶している）「ツドイちゃん」は、現在ロックバンドのキーボード奏者として活動しているらしい。

ああ、おもしろい。過去と現在とはちゃんとながっているのだ。それぞれの個性が少しずつカタチを変えながらもちゃんと生き続けている。

実は「よくばりよっちゃん」と語呂よく呼ばれていたような気がする私。ダンスも好き、音楽も好き、心理劇も好き、家族も好き、友達と遊ぶのも大好き。そして、子どもや保育にかかわる仕事もさせていただいている贅沢者。なのに、まだまだあれもしたい。これもしたい。やっばりよっばりなままだ。

保育園という原風景にいるよっちゃんと、時には対話しながら、これからもよくばりな人生を楽しく歩んでいけたら幸せだな、と思う。

（東京家政学院大学）

編 集 後 記

今月は「運動会」を特集した。運動会でリレーを見ると「なぜかわからないが涙が出てくる」と太田先生が書いておられるが、私も、保幼小中を問わず、リレーを見ていると胸が熱くなる。全力疾走する一生懸命な姿、伸びやかな体の美しさ、バトンをつないでいくというストーリーに感動してしまふ。また選抜リレーの選手には「誇り高さ」のようなものも感じられて、見ていてまぶしい印象もある。

一方で、そうしたまぶしい姿を傍から見る側の子どもの心持はどのようなものか。幼児の世界から競争を排除した方がいいとは思わない。し

かし次のようなエピソードを目の当たりにすると考えてしまふ。以前私の住んでいた地域の運動会では、希望者が好きな種目に出ることになっており、幼児から小学生まで入り混じってのリレーもあった。そのとき、人一倍熱心に練習に参加していたA君という六歳の幼児がいた。しかし走力のために「補欠」になり、本番当日はさびしそうに背中をまるめてリレーを観戦していた。後で役員の人が「あまり練習にまじめに出てこなかった子の方が出場しちゃって、なんかA君、見ててかわいそうだったわ」と言うのを聞いた。子どもの運動会で「補欠」は必要なのか。何のために何を補うのか。

*本誌へのご投稿をお待ちしています。 yujimai@yahoo.co.jpまで。

(浜口)

幼児の教育

第一〇五巻 第十号

(二〇〇六年十月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十八年十月一日

編集兼発行人 浜口順子

発行所 日本幼稚園協会

〒112-860 東京都文京区大塚二二-11

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-1860 東京都港区三田五二-11

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一-四一九

☎〇三-五三九五-六六一三(営業)

☎〇三-五三九五-六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇-11-19640

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

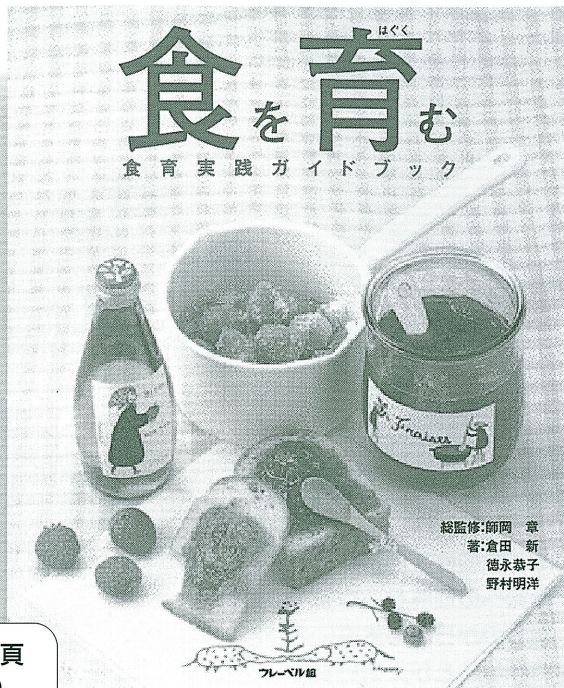
好評発売中!

食を育む

総監修 師岡章
著 倉田新・徳永恭子・野村明洋

食育実践ガイドブック

「食育」という言葉を、
「食を育む」(子どもの生活の中に存在するもの)と捉えることを前提とし、
食育に関する実践方法・事例を、
イラストや写真を豊富に用いて、具体的に楽しく紹介します。



26×21cm/160頁
定価2,100円(税込)

【目次から】

- 子どもがかがやく食育実践の進め方
- 食育のすすめ方と実施時期のめやす
- 食育実践方法の選び方
- PART1 農で食を育む
- PART2 料理で食を育む
- PART3 環境構成で食を育む
- PART4 遊びで食を育む
- 保護者・地域に向けての働きかけアイデア
- 資料(保育所における食を通じた子どもの健全育成(いわゆる「食育」)に関する取組の推進について/楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～/食育基本法)

キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

からだの実感を手がかりに
**わかる
子どもの心と保育**

小山孝子 著

26×21cm/84頁
定価1,890円(税込)



子どもの心を理解し
保育への理解を深めるためには、
自らのからだの実感に気づき
わかることが大切です。
今まで「わかったようでいて
実感としてよくわかっていなかった」
カウンセリングマインドが、
「実感として理解できる」ための
ノウハウを12のエクササイズを
とおして実際に学ぶことができます。
保育者と親、そして子どもたち、
それぞれの心が響きあう関係づくりのために
ぜひ読んでおきたい一冊です。

● 目次から ●

- はじめに
第1章 遊びながら学ぼう
第2章 フェルトセンスを確かめよう
第3章 子どもの立場と大人の立場
第4章 まるごと受けとめる
第5章 自分自身を受けとめる
おわりに
参考資料Q&A

キダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。